／島大生涯学習教育研究センター研究紀要１号／島大生涯学習教育センター研究紀要１号／４　藤井浩基　2002.04.24 14.47.32　Pag

日韓音楽交流史に関する教育実践的研究
―生涯学習における国際理解―

藤井　浩基
（教育学部音楽教育研究室）

A Study of Educational Practices on the History of Musical Exchange between Japan and Korea
―Consideration of International Understanding in a Lifelong Study Course―

Koki Fujii

The purpose of this study is to summarize my educational practices of a lifelong study course on the history of musical exchanges between Japan and Korea, and to consider ideas on how we can better develop our international understanding in a lifelong study course in the local community.

In 1999 and 2001 I occupied the position of lecturer on the above-mentioned theme at the Tottori prefectural library. This lecture series was presented once every two months for a total of ten times in two years. In this paper I have summarized the contents of each lecture with comments and self-critics. I have also tried to include some historical examples of musical exchanges between Japan and Korea into the teaching materials so as to broaden its accessibility to various educational situations and thus benefiting a better general international understanding.

Also, in 2000 I gave a lecture on the same theme at the Busan National University of Education. A transcript of that lecture is also included to help ascertain whether my basic research on this theme could be used as a common teaching material in both Japan and Korea.

はじめに

本稿は、国際理解[1)]を意図する生涯学習の場において、筆者が1999年度から３年にわたり、日韓音楽交流史をテーマに講演、講義等を重ねてきた実践的研究を総括し、生涯学習における国際理解学習と日韓音楽交流史の教材化のあり方を検討するものである。

筆者はこれまで、地域での日韓交流の場が、音楽を通した国際理解あるいは異文化理解を促進する場になることを願い、そうした理解を本質的に深めるための教材開発を意図し、日韓音楽交流史の基礎研究を進めてきた。加藤幸次は、国際理解教育のための学習内容を、５つの大領域と26の中領域に分類、設定しているが[2)]、筆者の研究内容は、第５の大領域である「二国間問題」のうち「文化交流」、「人物交流」、「交渉史」という３つの中領域にカテゴライズされるもので、柳宗悦、柳兼子、エッケルト、鄭京和（チョン・キョンファ）、高木東六、洪蘭坡（ホンナン パ）など日韓の音楽交流に関わった人物の事例研究が中心である[3)]。また、地域における日韓音楽交流の現状としては、鳥取県と韓国・江原道との交流事例を中心に調査をした[4)]。

近年、日韓音楽交流史に関連する内容の直接的あるいは間接的な記述を含む、新しい文献や研

究が増えている。植村幸生[5]、姜信子[6]、安田寛[7]、朴成泰[8]、戸田志香[9]、大西瑞香[10]ら、いずれも新しい世代の研究者が、交流史、伝統音楽、現代音楽事情、音楽教育事情の情報提供などそれぞれの視点に基づき、韓国の音楽への導入としてわかりやすく書いたものが注目を集めている。このような自他の研究成果や新しい情報を整理し、より咀嚼したかたちで、広く学校教育あるいは生涯学習の現場に還元していくことも、地域に根ざし、大学で教育・研究に携わる筆者に課せられた務めであると自覚している。

筆者は、1999年度に鳥取県立図書館講座として、「韓国の音楽と日本」をテーマに、通年５回の講座を担当した。また、同じ年度、鳥取県立生涯学習センター主催による「女性の生涯学習カレッジ」における「環日本海文化コース」の一講座として、「二千年の音楽交流―日本と韓国―」と題した講座を担当した。2000年度には島根大学教育学部と釜山教育大学校との教育・研究交流促進に関するプロジェクトの一環として、2000年11月、釜山教育大学校で「日韓音楽交流史」をテーマに２回の集中講義を行なった。2001年度には、1999年度に引き続き、「日韓音楽新事情」をテーマに、通年５回の鳥取県立図書館講座を担当した。

いずれも日韓音楽交流史をテーマにしており、筆者の基礎研究をソースにしているため、内容については重複している点も多い。本稿では鳥取県立図書館講座全10回における各回の講座の概要をまとめ、その検討を行なうことで実践的研究の総括とすると共に、釜山教育大学校の集中講義の概要をまとめ、日韓両国で試みた日韓音楽交流史の教材化とその実践をふりかえりたい。

Ⅰ．鳥取県立図書館講座での実践

１．1999年度「韓国の音楽と日本」

鳥取県立図書館では、地域における生涯学習の機会提供の一環として、環日本海諸国の歴史や文化をテーマとした講座が行なわれている。企画、運営を担当する環日本海交流室は趣旨を「隣国諸国間の交流史、各国の現在のすがた、民族問題などに照明を当て、資料を使って読み解く。そのことにより、将来の国際交流、地域の国際化を柔軟性のある新たな視点で捉える機会を広く県民に提供する。」[11]としている。

鳥取県では1994年に鳥取県と韓国・江原道が友好提携を結んだのを前後して、活発に様々な自治体、民間レベルでの交流が行なわれてきた。音楽に関わりのある交流も数多く、96年の高校総体や98年の全国高等学校総合文化祭での、韓国の高校生による伝統音楽、舞踊の発表、97年山陰夢みなと博覧会での韓国・江原大学校兪玉在舞踊団の公演、98年米子コンベンションセンターオープニングにおける韓国の世界的バイオリニスト鄭京和の演奏会、あるいは鳥取県から郷土の伝統芸能のグループが参加した99年江原道・束草観光エキスポなど、さまざまなレベルでの音楽を介した相互交流が行なわれている。97年からは米子―ソウル間の国際定期航空路誘致に向けて、県内中学校、高等学校が韓国への修学旅行を実施するなど、教育交流も俄かに活況を帯びてきた。

このような全県的な韓国との交流への取り組みと音楽との関わりを背景に、1999年度の講座のテーマを「韓国の音楽と日本」とした。同講座は、年度の初めに地元紙の日本海新聞文化面「図書館・出会いの広場」欄に、「講座への招待」と題した紹介記事が掲載される。この記事は年間を通じた講座の内容を概説するもので担当講師が執筆する。広報としては最も詳しく大規模なも

／島大生涯学習教育研究センター研究紀要１号／島大生涯学習教育センター研究紀要１号／４　藤井浩基　2002.04.24 14.47.32　Pag

ので、この記事自体が広く県民の意識を喚起する媒体となり得る。99年度の記事は下記のとおりである（資料１）。

講座は５月８日を初回として２か月おきに５回行なわれた。以下、各回の概要について、自己評価を交えながらまとめた。会場はいずれも鳥取県立図書館小研修室で、時間は14：00から２時間（質疑応答を含む）であった。

図書館 出会いの広場

藤井　浩基

講座「韓国の音楽と日本」への招待

昨年の秋、韓国の金大中大統領が来日し、韓国における日本文化開放を表明したことで、日韓の文化交流は新たな段階を迎えました。そうした動きに先駆け、鳥取県では環日本海交流の機運の中で、官民あげて盛んな文化交流が行われてきました。とりわけ、音楽はその中心的なジャンルです。

一昨年の夢みなと博を彩った江原道の伝統音楽や舞踊、昨年のビッグシップ開館を飾ったバイオリンの鄭京和など、さまざまな交流の場や身近な催しに、韓国からのゲストは今や欠かせない時代となりました。

しかし、歴史をひもとくと、一衣帯水の隣国である韓国からゲストを迎えるのは、今に始まったことではありません。古くは五世紀に、允恭天皇の葬儀に新羅の楽士が弔問に訪れ、歌舞をささげたという記録が、日本書紀に残っています。また、江戸時代には、将軍が代わった折など、十数回にわたり、朝鮮通信史が来日し、随行した音楽隊は壮麗な音楽を披露して、人々を魅了しました。

そして、私たち日本人は、音を奏でる韓国の文物にも魅かれてきました。例えば、山陰で数多く出土する銅鐸は、もとは朝鮮半島で楽器として使われていたものが移入され、日本で祭器に変化したといわれています。

また、奈良時代にもたらされた新羅琴は、正倉院の代表的な宝物として大切に保管されています。室町時代以降には、日本人が朝鮮鐘を多数持ち帰りました。それらは、いずれも国宝や重要文化財として、日本の貴重な文化遺産となっています。

藤井浩基さん

このように、私たち日本人は太古の昔から「韓国の音楽文化への思慕」をいだき続けてきた、といっても過言ではないでしょう。この度の講座「韓国の音楽と日本」では、この私たちの思慕の歴史をさかのぼることが大きなテーマです。

近代以降、日本の帝国主義が韓国の伝統ある音楽風土を蹂躙（じゅうりん）した時代がありました。そんな中、民芸運動で鳥取にもゆかりの深い柳宗悦は、声楽家の兼子夫人と音楽を通した友好交流に立ち上がり、また、米子市出身の作曲家高木東六は、戦中・戦後にかけて、韓国古典文学の最高傑作「春香伝」を題材にしたオペラを書くなど、韓国への思慕を毅（き）然として貫き通した人物もいます。

ただ、時代の残したしこりは、日韓の間に今も根強く、交流の場でよく歌われるアリランや日本の童謡・唱歌も、歴史的な背景への理解なしには、相手の気持ちを逆なでする場合もないわけではありません。私たちには、音楽のもつ「光と影」両面への理解が求められているのです。

全五回の講座には、それぞれ「二千年の音楽交流」「韓国の音楽文化に魅せられた日本人」「日韓の歌さまざま」「韓国の伝統音楽」「現代韓国音楽事情」と、副題をつけました。音楽をまじえながら、リアルな日韓音楽交流の姿に迫ってみたいと思います。

（鳥取女子短期大学非常勤講師）

◇お知らせ◇

講座「韓国の音楽と日本」の第1回「二千年の音楽交流」は、5月8日（土）午後2時から、鳥取市尚徳町の県立図書館で。参加無料。

（毎週火曜日に掲載）

資料１　『日本海新聞』1999年４月20日付　文化欄　p. 7

（１）第１回「二千年の音楽交流～日本と韓国」1999年５月８日（土）

第１回は講座の目的と進め方を簡単に説明した後、古代から近世まで各時代の注目すべき音楽交流の事例を引き合いに出しながら、ダイジェスト的に日韓音楽交流史を概観した。

まず、日韓それぞれの音への感覚、志向を比較するところからはじめ、ちょうど島根県の加茂岩倉遺跡から大量の銅鐸が発見されたことが話題になった時期で、銅鐸を楽器としてみた場合の日本と朝鮮半島の銅鐸の特徴を比較した。続いて百済の味摩之の来日、雅楽寮の設置と高麗楽の導入整理、礼楽思想と大仏開眼儀式、正倉院の新羅琴など、古代における朝鮮半島から移入した音楽や音楽に関する文物を中心に話題提供した。中世では朝鮮半島からの銅鐘の招来について話題とし、山陰地方に伝わる銅鐘を紹介した他、江原道にある上院寺の銅鐘を図表で見た。近世では朝鮮通信史による音楽交流を取り上げた。朝鮮通信史は90年代に研究ブームが起きたこともあり、受講者の関心の高さがうかがわれた。

これらの内容を90分で概観することは難しかったが、歴史に関心の高い受講者に支えられ、山陰地方の身近な話題やタイムリーな話題から日韓音楽交流史へ導入を図っていくという試みはまずまずの手応えがあった。

（２）第２回「韓国の音楽文化に魅せられた日本人たち」1999年７月10日（土）

第１回で近世までを取り上げたが、音楽やそれに関係する文物の輸入に話題が集中したことも考慮し、第２回では近代以降を中心に人物から日韓音楽交流史を探ろうと、音楽交流に貢献した４人について取り上げた。

宮城道雄は少年期から青年期にかけて約10年間過ごした朝鮮で箏曲および作曲の基礎を固めた。また、彼は朝鮮の音楽風土と朝鮮人の優れた音楽性にインスピレーションを得ながら独自の作風を確立していった。講座ではできるだけ音楽を聴く機会を作るため、宮城道雄自作自演の録音を入手し、彼が朝鮮で作曲した「水の変態」「唐砧（からきぬた）」を鑑賞した。

フランツ・エッケルトは1879年から1899年までお雇い外国人教師として日本で音楽教育に当たった後、一旦ドイツに帰国し、すぐ1901年から亡くなる1916年まで、朝鮮の李王職音楽隊で音楽の指導に従事した。ドイツ人であるが、日韓両国において西洋音楽とその教育の基礎を作った人物であり、例外的に取り上げた。

柳宗悦は朝鮮との関わりでは、光化門、朝鮮美術品の保存運動や評論で知られているが、音楽にも詳しく、朝鮮に対する思慕を表明するために、1920年より朝鮮各地で声楽家であった兼子夫人の独唱会を多数開催し、朝鮮の人々から慕われた。民芸運動により吉田璋也を通じて鳥取市とは縁が深い。

米子市出身の作曲家、高木東六も朝鮮の音楽に造詣が深く、戦前から「朝鮮舞踊組曲」、歌劇「春香」など朝鮮の音楽を素材にした作品を発表している。

（３）第３回「日韓の歌さまざま」1999年９月11日（土）

鳥取県は田村虎蔵、岡野貞一の出身県として、童謡、唱歌による「ジゲおこし」を行なっている。鳥取市はその中心地で人々の童謡、唱歌に寄せる関心は高い。こうした地域性を考慮し、日韓音楽交流史における童謡と唱歌の問題に言及した。韓国では、日本の植民地時代に音楽教育における日本の唱歌の強制、大正期童謡運動から派生した日本の童謡の普及運動が行なわれた経緯から、1945年以前に教育を受けた世代を中心に、日本の童謡、唱歌はよく知られている一方、アレルギーも残っており、日本文化として禁止されているもののひとつである。日韓両国の参加者

による交流の場で、これらの歌を取り上げた企画がみられるが、筆者は童謡、唱歌のもつ歴史的背景への理解が前提、と問題提起した。

ところで、韓国の歌としては「アリラン」や「トラジ」などの民謡や「故郷の春」などの童謡が日本でも広く知られている。また、1994年の韓国映画「西便制～風の丘を越えて」のヒットにより、日本でもパンソリへの関心が高まっていることなどを紹介し、それぞれ録音やビデオを通して鑑賞した。

（４）第４回「韓国の伝統音楽」1999年11月13日（土）

環日本海交流が進むにつれ、鳥取県にも韓国からの交流団が訪れるようになり、韓国側から披露される伝統音楽や舞踊に接する機会も多くなっている。また、鳥取県から韓国を訪れる人も増えており、韓国では身近に伝統音楽を体験できる場所も多い。こうした現状に即して、韓国の伝統音楽について専門的な理解を図る内容とした。

まず、韓国の伝統音楽を雅楽と俗楽に分けるところからはじめ、樹形図を用いて分類した後、宗廟祭礼楽、プンムルノリ、パンソリ、タルチュムなどを実際にビデオを用いて視聴した。続いて、韓国の伝統音楽を理解するためのキーワードとして、長短（チャンダン）、弄弦（ノンヒョン）、揺声（ユソン）、音階である平調（ヒョンジョウ）、界面調（ケミンジョウ）を説明した。韓国の伝統的な楽器としては伽耶琴（カヤグム）、玄琴（コムンゴ）、牙箏（アジェン）など10種類の楽器を取り上げ、ビデオや図表を用いて音や演奏法の特徴を説明した。

これまでの３回を終えた段階で、受講者から韓国の音楽そのものを学習したいという要望があり、これに対応した試みであったが、長短、音階など音楽理論の専門的内容を平易に解説することが非常に難しかった。

（５）第５回「現代韓国音楽事情」2000年１月８日（土）

98年10月に韓国の金大中大統領が、日本の大衆文化の段階的開放を表明し、99年10月には日韓閣僚懇談会で小渕首相（当時）が2002年を「日韓国民交流年」にすると発表した。また99年秋、韓国江原道の束草市では、観光エキスポが開かれ、鳥取県から文化団体をはじめ、多くの県民が訪れ有意義な交流が行なわれた。こうした動きの中で、日韓の音楽を取り巻く状況も刻々と変化している。

98年の IMF 経済危機以後の韓国音楽事情、日本文化開放への具体的な動きと問題点について、筆者が12月末に韓国を訪れて取材した内容をもとに言及した後、2002年のサッカー W 杯共同開催、日韓国民交流年に向けて、音楽交流の活性化が期待される今後の展望について、受講者を交えて、ディスカッションを行ない、全５回の講座を締めくくった。

２．2001年度鳥取県立図書館講座「日韓音楽新事情」

1999年度の受講者の方々から、日韓音楽交流史について専門的な学習を深めたいと再度講座を望む声があり、2002年に向けて日本における韓国への興味、関心が高まるであろうこと、2001年４月よりいよいよ米子－ソウル間の定期航空路が開設されることになり、ますます鳥取県における日韓の交流が促進されるであろうこと、学習指導要領の改訂等で学校教育における国際理解教育の重要性が以前にまして高まったことなどを考慮し、テーマを「日韓音楽新事情」とし、2001

／島大生涯学習教育研究センター研究紀要１号／島大生涯学習教育センター研究紀要１号／４　藤井浩基　2002.04.24 14.47.32　Pag

年度の講座を担当することになった。

講座の意図や内容の概略については前回同様、日本海新聞に紹介記事が掲載された（資料２）。以下は各回の概要である。場所、時間とも1999年度と同じである。

図書館 出会いの広場

「日韓音楽新事情」

鳥取県立図書館講座

藤井　浩基

藤井浩基氏

今年度「日韓音楽新事情」と題して講座を担当することになりました。九九年度に続き二度目です。

ここ一、二年で日韓をめぐる音楽事情も大きく変化しました。韓国では日本文化開放が進み、伝統音楽から最新の曲まで日本のあらゆる音楽が聴かれるようになりました。逆に日本にも韓国から続々と新しい音楽が入っています。例えば、今、人気の韓国ミュージカル「NANTA（乱打）」。厨房（ちゅうぼう）を舞台に料理人が包丁、まな板、鍋（なべ）などを使って、超絶的なリズム・パフォーマンスを繰り広げます。今春も来日し、連日超満員の盛況ぶりが話題となりました。

「サムルノリ」を思わせる韓国独特のリズム、ロック風の音楽、現代演劇の要素が見事に融合し、新たな韓国文化の爆発的なエネルギーに世界中が注目しています。

「サムルノリ」もすでに一般名詞として定着しました。韓国の伝統的な四つの打楽器（四物＝サムル）を用いた演技（ノリ）である「サムルノリ」。もとは創始者・金徳洙（キムドクス）氏が七八年に結成したグループ名でした。今や韓国音楽の定番として伝統音楽に数えられることもあるほどです。

もちろん伝統音楽も話題には事欠きません。最近もっぱらの話題はパンソリ「春香伝」を名匠・林権澤（イムゴンテク）監督が映画化したことでしょう。映画「春香伝」は全編にパンソリが流れる音楽映画で評価も高く、九五年に大ヒットした「西便制」に続いてパンソリブームが再来しそうです。「春香伝」といえば、三年ほど前、米子出身の高木東六氏が戦後まもなく作曲された歌劇「春香」について調べたことがあります。その折、横浜に高木先生を訪ね「いつか再演されれば…」とお話ししていた矢先、昨年、東京で五十年ぶりの再演が実現しました。本当に日韓の音楽を取り巻く動きの速さには驚くばかりです。

こうした潮流の中、学校教育現場でも韓国の音楽に関する授業が数多く行われています。新・学習指導要領に示された「総合的な学習」では国際理解教育が重視され、一衣帯水の隣国・韓国はその格好のテーマです。私も教育に携わる立場から、日韓音楽交流史の事例を教材化しようと試みています。例えば「故郷の春」や「鳳仙花」の作曲で知られる洪蘭坡（ホンナンパ）、先年亡くなった現代音楽の巨匠・尹伊桑（ユンイサン）など、日本とかかわりの深い音楽家のエピソードを窓口に、韓国を知るためのさまざまなアプローチが可能です。

今春、待望の米子―ソウル便が就航し一層身近になった韓国。ソウルへひとっ飛びで本場の韓国音楽が味わえます。私も先日「NANTA」をソウルの常設劇場で観（み）てきました。一方、境港の夢みなとシアターでは映画「春香伝」を観ました。まさに時間差を感じることなく、韓国文化にふれることができる時代です。私もふとしたきっかけから韓国の音楽にひかれ、研究を始めて十年になります。日韓音楽交流二千年の歴史をひもときつつ、音楽や映像を交えて、ダイナミックに変ぼうする「日韓音楽新事情」を楽しくお話ししたいと思います。

（島根大学教育学部専任講師・音楽）

◇講座「日韓音楽新事情」　第一回・知られざる音楽都市ソウルは、6月9日（土）午後2時から、鳥取市尚徳町の県立図書館小研修室で。講師は藤井浩基氏。参加無料。

資料２　『日本海新聞』2001年５月29日付　文化欄　p. 11

（１）第１回「知られざる音楽都市ソウル」2001年６月９日（土）

2001年４月に米子―ソウル間の定期航空路が開設され、鳥取県における韓国との交流は新たな段階に入った。韓国への旅行者の増加が予想され、この講座も実際的な韓国の音楽情報を提供する場として受講者のニーズに応えるべく、ソウルの知られざる音楽都市像を歴史とをひもときつつ、音楽スポットと最新音楽事情を紹介した。

あらかじめ筆者がソウルを訪れて撮影した映像と、受講者に配布した地図を照合しながら、ソウルの音楽探訪を疑似体験する形で進めた。芸術の殿堂、国立国楽院、国立劇場、ノリマダン、貞洞劇場、コリアハウス、世宗文化会館、ナンタ劇場など、観光ツアーにも含まれる音楽スポットを取り上げ、筆者がソウルから持ち帰ったパンフレットを回して情報を提供しその沿革を説明した。受講者の中には、実際に訪れた方もあり、また講座の後に旅行し、これらの施設を訪れた方もあった。ところで、2002年３月には同図書館隣の鳥取県民文化会館でコリアハウスによる韓国伝統音楽の公演が行なわれ、受講者の中に聴きに行かれた方もあったという。2002年４月にはナンタ、６月にはソウル芸術団の公演が鳥取県内で行なわれることになっており、講座の効果を期待したいところである。

（２）第２回「韓国の楽聖・洪蘭坡～『故郷の春』の作曲者を追って」
2001年８月25日（土）

韓国の童謡「故郷の春」は日本でもよく知られており、最近では韓国を代表する歌として童謡の域を超え世界で親しまれつつある。

作曲者の洪蘭坡は、韓国近現代音楽の先駆者として20世紀前半に幅広い音楽活動を展開した。その活動は、童謡の他にも「鳳仙花」などの芸術歌曲を作曲したほか、バイオリンの演奏活動、音楽協会の設立、音楽雑誌の出版、幼児教育、小説や随筆などの文筆活動と多岐にわたり、マルチな才能をもった偉大な音楽家として韓国では「楽聖」とよばれている。洪蘭坡は２度日本に留学し、東京音楽学校、東京高等音楽院で学び、日本のオーケストラにも所属していたが、日本の植民地支配への抵抗運動にも参加し、日本の官憲に追われ波乱の生涯を送った。日本と関わりの深い洪蘭坡について、講座では年譜を作成して配布し、説明を加えながら生涯をたどった。その間、適宜、韓国 MBC 放送制作のドキュメンタリー「現代音楽の先駆者－洪蘭坡」のビデオから一部を抜粋して視聴した。

洪蘭坡の作品は韓国の初等学校、中学校、高等学校各学年の教科書に取り上げられており、日本でも「故郷の春」は小学校第５学年用の音楽教科書にも表現教材として載っている。日韓の相互理解を深める上で両国共通の教材として今後その活用が期待される。

（３）第３回「韓国の現代音楽―20世紀の世界的音楽家・尹伊桑（ユンイサン）と現代の音楽家たち」
2001年10月13日（土）

講座には、かねてより最新の音楽について情報がほしいとの声があったが、例えば若い世代に人気の最新の音楽を取り上げるには、受講者の年齢層が高いと思われ、少々難解になることは覚悟して、現代音楽の尹伊桑を中心に、サムルノリの金徳洙（キムドクス）、指揮者の鄭明勲（チョンミョンフン）らの活動について言及した。

慶尚南道の統営（トンヨン）に生まれた尹伊桑は、ドイツに渡り、国際的な現代音楽祭に参加し、一躍、世界的な現代音楽の作曲家としての地位を確立した。しかし、東西冷戦、朝鮮半島の南北緊張という国際政治状況の中、作曲のために北朝鮮に入国したことから、1967年の東ベルリン事件で容疑者としてKCIAに拉致、拘留され、韓国政府からは死刑を宣告された。その後、西ドイツをはじめとした世界各国で、彼の名誉回復を求める署名運動が起こり、1969年に釈放され、その後亡くなるまでベルリンで作曲活動や後進の指導に当たった。彼に学んだ日本人の弟子は、現在、世界の第一線で活躍している。

講座では、ドイツZDFが制作したドキュメンタリー「傷ついた龍～尹伊桑」から彼へのインタビューや当時のニュース、演奏風景などを抜粋して視聴し、難解と思われがちな彼の音楽を、時代背景と同時並行して理解できるよう工夫した。ただ、筆者が時間配分を誤り、金徳洙や鄭明勲への言及がわずかになってしまい悔やまれた。

（４）第４回「韓国の音楽教育～熱心な音楽への取り組みと教育システム」
2001年12月８日（土）

第２回に洪蘭坡を取り上げた際、受講者から、日韓の音楽教科書の比較を要望する声があったことや、国際理解教育を重視する学校教育現場への情報提供を意図し、韓国の音楽教育をテーマとした。

講座では、日韓の音楽教育事情の比較として、韓国の音楽科教育のカリキュラムについて言及した後、日韓の音楽教科書の比較を行ない、伝統音楽を非常に重視していることをあらためて確認した。日本では、平成14年度からの新しい学習指導要領で、中学校で和楽器の学習が導入されるが、韓国での事例は参考になると思われることを示唆した。

今回は少し雰囲気を変えて、筆者が韓国で購入したケンガリを持参し、受講者に回して実際に触ったり、音を出したりするなどの体験型の活動を行なった。

続いて、韓国における民間の音楽教育の例として全羅北道全州市の国楽院でのパンソリの学習風景と、韓国ではパンソリの天才少年として知られる柳太平洋が、師匠とマンツーマンでパンソリの稽古をしている場面をビデオで視聴した。パンソリの迫力と緊張度の高い声質と相俟って、韓国における音楽教育熱と伝統音楽を継承する厳しさが伝わる映像であった。12月で学期末が近かったせいか、学校の先生方の参加は予想より少なかった。

（５）第５回「日韓音楽交流～今後の展望」2002年２月９日（土）

「日韓国民交流年」を迎え、サッカーW杯に向け、音楽においてもイベントが目白押しである。その例に筆者が関わっている高木東六の歌劇「春香」の再演について話題提供を行なった。朝鮮古典文学「春香伝」を扱った「春香」は、戦前に作曲されていたものが戦禍により焼失し、戦後の混乱期に在日本朝鮮人連盟の委嘱で再度作曲し、在日朝鮮人と日本人の芸術家が一致協力して昭和23年に初演が実現したものである。その後、朝鮮戦争や朝鮮半島の南北緊張の影響により長らく上演されることがなかったが、W杯を機に市民の手により、2002年４月、横浜市で54年ぶりに再演されることになった。

また、今後の交流を展望するひとつのきっかけとして、NHKが制作したドキュメンタリー番

／島大生涯学習教育研究センター研究紀要１号／島大生涯学習教育センター研究紀要１号／４　藤井浩基　2002.04.24 14.47.32　Pag

組「３つの祖国―吉屋潤」を一部視聴した。日本、韓国、北朝鮮の３国を視野に入れながら音楽活動を行なった在日韓国人の吉屋潤を通して、日本と朝鮮半島の文化がクロスオーバーする多文化共生社会のあり方について考える機会とした。吉屋潤はソウル五輪のテーマソング「朝の国から」の作曲者であり、ビデオの中でソウル五輪の場面も度々出てきたが、ちょうど当日はソルトレークシティ冬季五輪の初日にあたり、サッカーＷ杯同様、大きなイベントがもたらす交流の意義を考える上でもタイムリーであった。

最後にＷ杯後の音楽交流のあり方について、従来ありがちだったイベント参加型の交流の段階を経て、自らの興味・関心に応じて音楽への理解を深め、よりパーソナルな交流を個々人で模索していく段階にきていることを示唆した。それには、学校教育や生涯学習における国際理解、異文化理解の充実と、産官学が連携して情報提供を行なうことが大切であるとした。当日は朝日新聞社の取材があり、２月10日付の同紙鳥取版の記事になった（資料３）。

３．講座の実際とその検討

この講座は、公共図書館における生涯学習の機会提供と、環日本海交流の推進と地域の国際理解推進をねらいとしたものである。そのような視点から、1999、2001年度とあわせて、生涯学習における国際理解のあり方について、筆者の実践を通して検討する。

（１）受講者の多様さ

講座には毎回20名から25名の受講者があった。参加無料、事前申込不要で、自由に受講できた。受講者の男女比はほぼ半々で、年代は30代から90代までと非常に幅広く、約７割が毎回欠かさず受講される方であった。なお、受講者の情報については、プライバシーにも配慮し、筆者には全く知らされていない。質疑応答でのやりとりや講座後の懇談の中で自然に知り得た情報から受講者の傾向を推測するのみであった。受講者には、在日の方や戦前に朝鮮に在住していた方もおられ、また旅行等による韓国への渡航経験者も多かった。受講の目的は、生涯学習の他、行政における国際交流事業や教育現場における活用などさまざまで、各回のテーマや内容に対して、受講者の目的やレディネスは非常に多様であったといえる。

（２）講座の進め方と評価について

各回の講座のテーマと内容は、各年度５回分を企画段階で環日本海交流室と相談し決めていたが、実際に受講者の人数や傾向を筆者の判断で見極めながら柔軟な対応を心がけた。講座は講演形式で100分の講演と10分程度の質疑応答により構成された。内容は筆者が日韓音楽交流史に関して蓄積してきた基礎研究の中から、テーマに即して選択し、１回で完結するように構成した。継続的な受講者に加えて、毎回、新規あるいは飛び入りの受講者もおられたことによる。国際理解学習における現代的課題性と地域との関わりの必要性に対応し、内容に関連したタイムリーな話題と地域における話題を必ず入れるようにした。

講座では可能な限り、映像資料や録音資料を視聴する時間を設け、引用文献や参考文献、映像、録音資料について、あるいは地域における日韓音楽交流に関する情報があれば積極的に紹介し、講座終了後に、受講者方が自らの興味・関心に応じてフィードバックできるように配慮した。資

料については、受講者からの照会依頼に即座に応じることができるよう、参考文献のリストのメモ、引用文献の引用箇所のコピー、主要参考文献は携帯した。

講座を進めていく上で、特に難しさを感じたのが、受講者の手応えを探る方法が限られていたことである。これは生涯学習の評価のあり方に関わる問題でもある。受講者のほとんどが筆者より年長で理解度を図るような問いかけは難しかった。各回毎に自由記述の感想の提出を求めることも不可能ではなかったが、以前、環日本海交流室企画の別の講座で講師が毎回感想の提出を求めたところ、受講者からは不評だったとのことで、感想の提出は求めなかった。その分、講座の前後の時間を利用して、できるだけ受講者と直接話をして感想や要望を聞き取るようにした。また、手紙を下さる方もおられた他、環日本海交流室の相談員の方を介して、間接的に伝達される場合もあった。受講者と筆者との接点として同室の機能は重要であり、感想や要望を受けて筆者に伝えて下さることはもとより、講座の内容に関してもっと深く知りたいという方には、相談員の方が、同室の開架図書や雑誌の中から、内容に応じて資料を紹介されるなど、講座後のアフターケアを含め、筆者の行き届かない面を補って下さった。こうしたやりとりを重ねる中で、筆者は受講者の反応を知ることができ、自己評価と共に、次回のテーマや内容を精査する作業を、限られた条件の下で試みた。

（３）広報の意義

この講座の特色として広報の充実に言及しておきたい。前述したように年度当初には日本海新聞に紹介記事が掲載される。また、各回は新聞の鳥取版やFM山陰等で催し物として紹介された。同図書館内には、講座の１ヶ月前から環日本海交流室製作によるチラシが置かれるほか県の関係部署や学校等に広く配布された。チラシの裏面には筆者が書いた各回400字程度の紹介文が載せられ、ラジオでは200字程度にまとめたものが放送された。

環日本海交流室によると、このチラシが館内に置かれるのは100部であるが、講座の日までにチラシはほとんどなくなり、来館者の関心は高いとのことであった。その事実からすると、受講者数は決して多くなく、筆者の力不足を反省せざるを得ないところである。ただ、広報の意図が、参加を募ったり促すこと、あるいは参加した場合のみの学習効果を想定するのみではなく、新聞記事、チラシ、放送などの広報自体が、学習の場であり教材になり得ることが示唆されるところである。行政とマスメディアが連携した生涯学習の広報および情報提供の重要性と、この講座が充実した広報によって支えられていたことをあらためて認識することできた。

（４）生涯学習における国際理解の学習とその方法について

ところで、本稿執筆にあたり2001年度の講座総括の参考にするため、講座の終了後、環日本海交流室を通じて自由記述のアンケートを、これまでの参加者のべ43名全員に郵送し回収した。３月20日現在25名分が回収されている。その中で今後の講座を考える上で重要な示唆と思われたのは、生涯学習における国際理解の学習方法についてであった。

学校教育における国際理解教育の実践では、ほとんどの場合、単なる受動的な知識や概念の理解を超えて、「自ら課題を見つけ自ら解決する」という「総合的な学習」の要素をもつ、プロジェクト参加型、体験型の学習方法がとられている。この講座は、はじめに講演形式による講座とい

／島大生涯学習教育研究センター研究紀要１号／島大生涯学習教育センター研究紀要１号／４　藤井浩基　2002.04.24 14.47.32　Pag

う枠組みがあり、基本的に受講者の受動的な学習形態をとる。しかしながら、講座の本旨は、国際理解の推進を念頭においた学習の場であり、筆者は、講座における学習成果が何らかのかたちで、受講者自ら自己評価できるような学習の流れを設定する必要を常々感じ、資料や日韓音楽交流に関する情報を随時提供し、受講者自らフィードバックできるように心がけてきた。

この点は、筆者以上に受講者の欲求は強く、何らかの交流、国際理解を実際に体験できるようなプログラムを組み込んでほしいという要望が複数あった。例えば、音楽をテーマにした韓国旅行の企画を望む意見や、講座の中で、実際に韓国の楽器にふれる機会、演奏に向けて練習するといった試みをもっと積極的に取り入れてはどうかという提案などであった。国際理解、異文化理解には、生涯学習においても参加型、体験型の学習活動を含める必要があると感じた。

ただ、一方で先に参加型、体験型の学習をし、そのフィードバックとしてこの講座を受講した人も何人かおられたことも付記しておきたい。中でも、高校生の参加者は、修学旅行で韓国を訪れた時の感動的な交流の経験がきっかけで、もっと日韓の関係を深く知りたいと講座を受講したという。また、あるご年配の方は、大学生のお孫さんが自宅に連れてきた韓国人留学生との交流経験をもとに、日韓音楽交流史について学びたいと思われたという。これらの事例は、子どもたちが学校で経験した国際交流体験が、家庭に派生し、生涯学習へのモチベーションにつながっているケースととらえることができる。

ところで、この講座には学校教育現場に携わっておられる方が毎回入れ替わり参加して下さり、その都度、貴重な意見をいただくことができた。筆者の取り上げた内容について、音楽科での教材化のみならず、人権学習の教材としてその活用を試みたいという意見もあり、日韓音楽交流史の多様な教材化の可能性について認識することができた。

Ⅱ．釜山教育大学校における集中講義「日韓音楽交流史」

筆者は、「島根大学教育学部・釜山教育大学校の教育・研究交流促進に関するプロジェクト」の一環として、2000年11月、釜山教育大学校において４回の集中講義を行なった。そのうち２回は「日韓音楽交流史」をテーマにした講義である。11月14日18：00から２時間、初等学校現職教員でもある大学院生23名を対象に、また11月15日11：00から２時間、同大学校音楽科の学生68名を対象に同じ内容で行なった。いずれも場所は釜山教育大学校新音楽棟音楽鑑賞室である。以下は、講義内容の日本語要旨である。

なお、この要旨についてはすでに同プロジェクト報告書[12)]に掲載されているが、要旨作成段階での筆者の不明により、用語の使い方等に初歩的なミスや誤謬が生じた。本稿では、これらを修正し全面改稿する。

講義「日韓音楽交流史」【要旨】

中国の古い言葉に「一衣帯水」という言葉がある。帯のように狭い海や川で隔てられている状態をいい、近いことを意味する韓国と日本にふさわしい言葉である。島根大学のある島根県は日本海（東海）に面しており釜山とも近い位置にある。

日本海（東海）は古代から日韓の音楽交流に欠かせない海であった。音楽にまつわる伝説が日

韓ともに残されている。島根半島東端にある美保神社の祭神は、古くから鳴り物を好むといわれ、美保神社にはたくさんの奉納楽器が納められている。韓国でも東海に面した地域には、音楽にまつわる伝説がたくさんあり、釜山のある慶尚南道では特に処容の伝説が有名である。音楽を愛する韓国人の国民性は日本でもよく知られているのと同様に、日本の中でも島根県はとても音楽が盛んな土地柄である。

海を通しての音楽交流は楽器からもわかる。例えば島根県でも多く発掘されている銅鐸は紀元前１世紀頃に、中国から朝鮮半島を経て伝わった。朝鮮半島では音を出すことに意味があったが、日本では次第に大きくなり、音を出すよりも祭器としての役割をもった。ただ、山陰の銅鐸はあまり大きくなく、朝鮮半島の銅鐸に似た小さな銅鐸も発掘されている。これらの銅鐸は日本海を経てもたらされたと思われ、山陰は古代から朝鮮半島との交流の窓口だった。

朝鮮半島からもたらされた楽器といえば、奈良の正倉院に保存されている新羅琴（伽耶琴のこと）が有名であり、９世紀ごろ朝鮮からもたらされたとされている。伽耶琴は、新羅の楽聖・于勒（ウルク）が愛奏した楽器といわれている。筆者は先日（2000年10月）、于勒が晩年を過ごし、弟子を育てたという忠州の弾琴台に行ってきた。

朝鮮半島からは音楽そのものもたらされた。奈良時代に聖武天皇は礼楽思想をもとに雅楽寮を設置した。広く東アジアから伝わってきた音楽は、その後、左方唐楽、右方高麗楽に整理され、日本の宮中の正式な音楽となった。高麗楽は朝鮮半島の音楽に由来するものである。雅楽寮は宮内庁式部職楽部に引き継がれ、雅楽を伝承している。韓国の大統領の来日時には、皇居では高麗楽を演奏するのが通例である。韓国では現在、高麗楽が残っておらず、韓国の伝統が日本で守られていることに歴代の大統領は感激したとのことである。ところで、日本人を魅了した音を奏でる文物に朝鮮鐘がある。朝鮮鐘は音もよく、形、表面に彫刻された絵のすばらしさや優れた耐久性から14、15世紀頃、日本人が多数持ち帰った。島根県にも有名な朝鮮鐘が３つあり、重要文化財に指定されている。戦国時代の武士は合戦の際、音のよい朝鮮鐘を合図に用いるため、寺に借用書まで書いて持ち出している。壬辰・丁酉倭乱の時に、合戦に持ち出された朝鮮鐘も多いという。

その壬辰・丁酉倭乱（文禄・慶長の役）を起こした豊臣秀吉がひそかに朝鮮の音楽に憧憬の念を抱いていたことは、意外に知られていない。壬辰・丁酉倭乱の前に、来日した朝鮮使節が随行してきた国楽の楽団を羨ましく思った秀吉は、楽団の奏楽を伴って朝廷に出仕したいと、対馬宗氏を通じて使者に楽団の借用を申し出るが断られたこともある。

江戸時代には十数回にわたり朝鮮通信使が来日し、瀬戸内から東海道を経て江戸に至る道中で、随行した楽隊が壮麗な音楽を披露して人々を魅了した。一方、幕府も式楽である能で通信使をもてなし相互の音楽交流を試みたが、能は通信使になかなか理解されず、新井白石は急遽、京都の宮中から雅楽の楽団を江戸によび、雅楽でもてなすという工夫もしている。彼は、日本と朝鮮の音楽観の違いに敏感に気づくとともに、日本の雅楽が高麗楽の流れを汲んでいることをふまえて臨機応変に対応した。

こうして歴史をみると、日本は朝鮮から実に様々な音楽的な影響を受けている。しかし、今世紀前半、日本はそれまで築き上げてきた音楽交流の歴史と朝鮮の伝統ある音楽風土を、蹂躙してしまった。その中でも音楽を通して毅然と朝鮮への思慕を貫いた日本人もいる。

／島大生涯学習教育研究センター研究紀要１号／島大生涯学習教育センター研究紀要１号／４　藤井浩基　2002.04.24 14.47.32　Pag

少年時代を朝鮮で過ごした箏の宮城道雄は、朝鮮で体験した音の風景を巧みに自分の作曲に取り入れたほか、朝鮮人の音楽性の高さを自身の随筆の中で明らかにしている。（宮城道雄作曲、演奏の「唐砧」、「春の海」を鑑賞した。）

日本の思想家で朝鮮の美術にも造詣の深かった柳宗悦は、声楽家の兼子夫人をともない音楽を通した友好交流に立ち上がった。彼は何度も朝鮮を訪れ兼子夫人の音楽会を開催して、朝鮮の人々に日本の非を詫び自らの思慕の念を伝えようとした。朝鮮人を対象にした音楽会は当時少なく、柳夫妻の真摯な思いに朝鮮の人々は大歓迎したという。彼が朝鮮の美術品の保存運動を幅広く展開し、中でも光化門の保存を強く主張したことは有名である。

日本の作曲家・高木東六は、戦中・戦後にかけて朝鮮古典文学「春香伝」を題材に歌劇「春香」を書いている。高木氏は今年96歳（2000年11月当時）で、筆者の地元である米子市の出身である。戦後の混乱の中、「こういう時こそ音楽が必要」と在日朝鮮人が費用を出し合って、もともと朝鮮の音楽に造詣の深かった高木氏に委嘱し、1948年成功のうちに初演された。「春香」は当時、日本の第一線の音楽家と多くの在日朝鮮人が協力して取り組んだ記念碑的な戦後初の邦人オペラとなった。「春香」の一部が今年の５月に、在日韓国人ソプラノ歌手の田月仙さんにより、東京で50年ぶりに演奏され注目を集めている。

1988年のソウル・オリンピックを契機に、1980年代後半から日韓両国の自治体間交流、民間交流が盛んに行なわれるようになった。音楽は交流の場において、相互のコミュニケーション手段として不可欠であり、その役割の重要性は交流参加者の多くが認めるところである。こうした潮流の中、筆者は文化・芸術の交流による日韓相互理解の必要性を認識し、特に日韓の音楽交流を歴史的に遡及する研究を続けてきた。

折しも、1998年より韓国では日本の大衆文化の段階的開放を行なわれているとともに、再来年2002年は日韓共催によるサッカーＷ杯にあわせて、「日韓国民交流の年」と銘打たれ、交流を推進する気運のさらなる高まりが期待される。

日韓の文化交流は、交流の主体者である日韓両国民ひとりひとりの交流に対する意識と相互理解の深まることが何よりも大切であり、学校教育、生涯学習現場における国際理解教育、異文化理解教育に課せられた役割は大きい。そうした視点からも、音楽教育に携わる私たちにとって、古代から現代に至るまでの日韓音楽交流史への理解は、今後の交流を展望する上で不可欠であると思われる。

おわりに

筆者が鳥取県立図書館講座を担当した1999年から2001年にかけて、日韓関係は大きく動いた。サッカーＷ杯に向けて官民あげての交流が活発化し、特に文化交流においては、韓国における日本の大衆文化の段階的開放が進み、音楽や映画をはじめとしてあらゆる分野で交流の進展がみられている。その一方で、2001年には、いわゆる歴史教科書問題、小泉首相の靖国神社参拝問題により、自治体、民間レベルでの交流事業も中止や延期を余儀なくされるなど、日韓関係は大きく揺れた。そのような日韓を取り巻く環境の変化の中、鳥取県立図書館の講座では、1999年度、2000年度と多くの受講者の方々と共に、日韓音楽交流史を通して、両国の過去を遡り、現在を見

つめ、未来を展望していく地道な実践をすることができた。また、釜山教育大学校では、筆者の日韓音楽交流史の研究が、日韓の相互理解を促進するという意図とともに、韓国でどのように受容されるかを図る上で非常に有意義であった。日本側からの一方向的な見方ではなく、両国で共通に理解され得る日韓音楽交流史の研究をめざし、今後も研究を継続していきたいと考えている。また、本稿では生涯学習における国際理解学習のあり方について検討したが、この成果を学校教育における国際理解教育と日韓音楽交流史の教材化にさらに活かしていきたいと考えている。

謝辞

２年度にわたり、講座を企画、運営して下さった鳥取県立図書館環日本海交流室相談員の薛末子さん、田苗真里さん、講座の内容に関して、常に筆者の相談に応じて下さり、ご教示下さった薛幸夫氏に感謝申し上げます。

本稿は平成13年度科学研究費補助金奨励研究(A)「日韓音楽交流に関する通史的基礎研究」の一部である。

註

１）本稿では「国際理解教育」を学校教育の文脈で、「国際理解」及び「国際理解学習」を生涯学習の文脈でそれぞれ用いている。

２）加藤幸次、浅沼茂編著『国際理解教育をめざした総合学習』黎明書房、1999年、pp.16－18。

３）例えば、以下の拙稿および研究発表など。
「柳宗悦の音楽観（１）－朝鮮渡航音楽会を通して」『北東アジア文化研究』鳥取女子短期大学北東アジア文化総合研究所、第３号、1996年、pp.35－60。
「日本におけるフランツ・エッケルト像とその変化」同上、第７号、1998年、pp.65－76。
「1970年代の日本における鄭京和受容の諸相」同上、第８号、1998年、pp.71－85。
「高木東六作曲歌劇《春香》の構想から完成まで」同上、第９号、1999年、pp.37－52。
研究発表「韓国の楽聖・洪蘭坡」2001年度中・四国大学音楽教育学会

４）拙稿「日韓音楽交流の現状と鳥取県」『韓国江原道の歴史と文化Ⅱ』鳥取女子短期大学北東アジア文化総合研究所、1999年、pp.55－61。

５）植村幸生『韓国音楽探検』音楽之友社、1998年。

６）姜信子『日韓音楽ノート』岩波書店、1998年。

７）安田寛『日韓唱歌の源流』音楽之友社、1999年。

８）例えば、朴成泰「韓国近代教育史における『愛国唱歌運動』の意義」『音楽教育学』日本音楽教育学会、第24－２号、1994年。

９）戸田志香「連載愛される韓国歌曲１～12」『月刊韓国文化』所収、栄光教育文化研究所、1996年。

10）大西瑞香「日韓の伝統音楽教育」『北東アジア文化研究』、鳥取短期大学北東アジア文化総合

／島大生涯学習教育研究センター研究紀要１号／島大生涯学習教育センター研究紀要１号／４　藤井浩基　2002.04.24 14.47.32　Pag

研究所、第15号、2002年、pp. 53－66。
11）鳥取県立図書館環日本海交流室講座企画書による。
12）『島根大学教育学部と釜山教育大学校との教育・研究交流促進に関するプロジェクト報告書』同プロジェクト、2001年。

その他の主要参考文献

・尹伊桑、L. リンザー（伊藤成彦訳）『傷ついた龍』未来社、1981年。
・鳥取女子短期大学北東アジア文化総合研究所編『鳥取県の環日本海交流』富士書店、1996年。
・谷川彰英他『国際理解教育と国際交流』国土社、1996年。
・魚住忠久『共生の時代を拓く国際理解教育』黎明書房、2000年。
・木村誠他編『朝鮮人物事典』大和書房、1995年。

隣国とのしこりを取り除く

県立図書館で「日韓音楽新事情」最終回

昨年6月から韓国の音楽の過去と現状について学び、よりよい関係の構築について考えてきた連続講座「日韓音楽新事情」（計5回）の最終回が9日、鳥取市尚徳町の県立図書館で開かれた。

県立図書館の環日本海交流室が企画。先生役は島根大学教育学部の藤井浩基講師が務めた。これまで韓国で楽聖と言われる洪蘭坡（ホンナンパ）や民族音楽を大切にする韓国の音楽教育の現状などをわかりやすく解説してきた。

最終回は市民約20人が聴講。米子市出身の作曲家高木東六さんが終戦直後の47年、韓国の古典「春香伝」を基に作曲したオペラが今春復活することなどが説明された。

藤井講師は「ワールドカップで日韓交流が盛り上がっているが、その後にどんな交流を続けるかが大事。隣国だけに関係が悪くなることもあるが、音楽はそんなしこりを取り除いてくれると、私自身、講義を通して再認識した」と話していた。

資料３　『朝日新聞』鳥取版
2002年２月10日付　p. 28